

# 高校生へ 私が選んだ1冊の本



「カガク力を強くする！」

元村 有希子：著

岩波書店

神奈川県

神奈川県立横須賀大津高等学校

田中 沙弥

私たちの身の回りには、数え切れないほどたくさんの科学があふれている。いつも手にしているスマートフォンや、天井で光り輝いている電灯も科学の産物である。しかし、こんなにもたくさんの科学に囲まれているにもかかわらず、私たちの多くは科学を知らない。一部の科学者と呼ばれる人たちだけが、科学と向き合い、科学力を身に付けることができているとよいだろう。

では、その科学力とはなんなのだろうか。「疑い、調べ、考え、判断する力」これこそがまさに科学力であると、著者が述べている。インターネットの普及に伴って、増加している虚偽の情報、そんなものが氾濫している今日に、真実だけを掴み取るためには科学力を身につける必要がある。この本では、医療現場や災害時での科学・技術の活躍についても言及している。医療技術が驚くべきスピードで発達していることは、周知の事実であるといえる。また、災害発生時の予測によって、被害を最小限にするための対策には、これまでの周期や規模といった情報が必要になってくる。医療技術の発展も、情報からの予測も科学・技術なくては成り立たなかった。

この本は、科学力とは何なのか、それを身につけるにはどうすればよいのか。さらに科学がこの世界で私たちにどのような影響を与えているのかを、具体例とともに記してある。

たくさん挙げられている具体例の中で、私が一番印象に残っているのは、「水からの伝言」という写真集の例である。これは、疑似科学を説明するために用いられた例で、科学的根拠のない事象をまるで真実であるかのように伝えている。この写真集では、「水が言葉を理解する」という仮説を反証できない実験によって検証しており、信憑性は低いにもかかわらず、ベストセラーになったとある。なぜこのようなことが起こってしまったのだろうか。この写真集や写真集に載っている実験のことを知った人たち一人一人が、全てを鵜呑みにするのではなく、自分で考え、疑問に思ったことを追求することが必要だったのではないだろうか。普段深く考えることなく生きてきた私は、こ

の例から科学力をつけることの大切さを知った。

私はこの本で初めて、「ゲノム編集ベビー」というものを知った。ゲノム編集ベビーとは、受精卵にゲノム編集が行われて生まれた赤ちゃんのことだ。

中国では、父親が HIV に感染している赤ちゃんのゲノムを編集し、HIV の感染に関わる遺伝子の働きを止めようとした。しかし、その頃すでに子供への HIV 感染を防ぐ別の手立てが確立されていたことから、人体実験なのではという指摘や、デザイナーベビーをやることにつながってしまうとの批判があったようだ。

私個人の意見としては赤ちゃんが無事健康に生まれてきてくれたのなら、そこに至るまでの経緯がどのようなものであったとしても、良かったと思ってしまう。だが、科学者が自らの利益のためにこの方法をとったことは、それまでに科学の進歩のために尽力してきた人たちが積み上げてきた信頼を、全て崩してしまいかねないできごとのように思える。科学者が嘘を吐かないというのは誰が決めたというわけでもないが、普段から誠実に向き合っていないとせつかくの発見も相手にしてもらえなくなってしまうかもしれない。それだけはなんとしても避けなければならないことだ。

もし人類が危機に陥ったとき、その事態を収束するには科学と科学者の力が確実に必要である。それなのに、その科学者のことを誰も信じてくれないのなら、その時助かることができるのは研究をした本人だけになってしまうだろう。全員を救える方法があったとしても、知らなければ意味がないのだ。同様に、医療や災害時に役に立つ技術も、信用されていなければ使ってもらえない。救えるのに救わせてもらえない。そうなることを無意識のうちに危惧して、科学者はできる限り真実を伝えようとしているのだろう。

この本を読み、この文章を書いたことで、自分がいかに無知で世間に流されてきたのかが少し分かったかもしれない。しかし、無知は恥ずべきことではないと知り、これからどう生きるか、これからの世界をどのような目で見ていくかを考えるためのよい機会になったと思う。科学・技術の産物をただ享受するのではなく、その力を借りて、科学力をつけていきたい。